

産地強化に向けた新たな経営モデルの提案

■背景とねらい

南信州は果菜類の生産が盛んな地域であり、なかでもきゅうりは地域の主力品目として位置づけられている。前年度の活動では、収量や品質、経営安定のため、雨よけなどの施設化を推進してきたが、一方で連作障害の顕在化が課題となっている。また、管内ではきゅうりと市田柿を組み合わせた複合経営が多く、きゅうりの雨よけハウスを柿干場に活用している。これらの背景を踏まえ、今年度から新たに、連作障害の防止に効果的な養液栽培の経営評価と導入の推進、および産地強化に向けて地域特産品である市田柿との複合経営モデルの作成に取り組んだ。

■本年度の取組

1 養液栽培の導入推進

(1) 推進に向けた課題の把握

養液栽培に対する農業者らの関心を把握し、経営評価と導入手引きの作成に向けた課題を明らかにするため、生産者アンケートを実施した。

(2) 養液栽培における仕立て本数の検討

養液栽培では「つる下ろし」と呼ばれる仕立て方法が用いられている。この「つる下ろし」に適した仕立て本数を検証するため、令和2年に養液栽培を導入した生産者の雨よけハウスにおいて、子づる2本仕立てと3本仕立てが収量や生育に及ぼす影響について調査した。



試験ほ場の様子



つる下ろし栽培

2 市田柿との複合経営モデルの作成

養液栽培のアンケートに併せて、市田柿との複合経営の実態を把握するためのアンケート調査を行った。また、きゅうりと市田柿の複合経営に取り組む農家4戸を選定し、事例調査を行った。こ

れらの調査結果をもとに複合経営モデルの作成に取り組んだ。

■本年度の成果

1 養液栽培の導入推進

(1) 推進に向けた課題の把握

管内のきゅうり農家約270戸を対象に、JAと連携して栽培指導会等でアンケートを行い、88名の生産者から回答があった。年代が若いほど養液栽培への関心が高く、特に導入コストや収量、作業がどの程度省力化されるかについて関心が高かった。

(2) 養液栽培における仕立て本数の検討

3本仕立て区は生育に伴い子づるが混み合ったため、作業性を考慮して調査期間の途中から一部子づるの本数を減らした。最終的な仕立て本数は2本仕立て区で平均2.1本、3本仕立て区で平均2.6本となった。調査の結果、3本仕立て区と比較して2本仕立て区は作業性が良く、期間を通した収量はやや多い傾向が見られた。

2 市田柿との複合経営モデルの作成

アンケート調査では回答者の半数以上が市田柿を取り入れた複合経営をしており、多くの設備、労働力が必要になることに課題を感じていた。これらの調査結果と農家への聞き取りをもとに、設備の導入コストと旬毎の労働時間、繁忙期の栽培管理のポイントなどが分かるようにまとめた複合経営モデルを作成した。

■今後の課題と対応

養液栽培については導入農家への実態調査などを通じて養液栽培の経営モデルを作成する。あわせて多大な労力が必要なる下ろし作業の効率化を図るため野菜花き試験場と連携して「更新型つる下ろし栽培」の検討を行う。また、複合経営モデルについては技術的な視点を加味した導入手引きの作成と、柿に次いで組み合わせが多かったねぎとの複合経営モデルの作成に取り組む。

(地域第一係：倉科 妙香)